

# 史泉

## 第一二号

青年軍人聯合会について……………三上 諦聴 (1)  
——黄埔軍官學校に於ける——

建中元年朱巨川奏授告身と唐の考課(中)……………大庭 脩 (9)

品 部 考(上)……………江里口隆信 (25)

近世資料の分類について……………有坂 隆道 (38)

日本史  
講座(4) 律令時代末期の国家と文化(その三)……………横田 健一 (45)  
——武士発生の諸条件と封建制起源の問題(続)——

紹介 作道洋太郎著「近世日本貨幣史」……………津川 正幸 (56)

後藤捷一編「有賀以敬斎長伯阿波日記」……………有坂 隆道 (58)

史学関係主要雑誌論文目録(六月以前追補、七一九月発行分)……………(59)

# 石濱先生古稀記念東洋學論叢

B5版約八五〇頁 頒価二、五〇〇円

説元典章札記三則

現代ハルハ口語文に現われた特殊語の解釈について

「郎世寧伝政略」補遺

大谷探險隊將來のクチ語文書断片

六国史の体例

元刊百丈清規について

Jatavadamania 序説

丁令柔然史二考

河西ウイグル史に關する一研究

— 國際關係特に對遼關係を中心として —

明清淨土教の指向

奴兒干永寧寺碑蒙古女真文釈稿

部族名キタイニ契丹語源考

入唐僧円修・堅慧とその血脈図記

何啓・胡礼垣の新政論議

京都大学考古学教室蔵ネヘルヘテペセネブ石碑について

ブツダグフヤ密教の立場

清史稿の諸版について

日本填詞史の一節—加藤明文と林家の一門—

莊子妄言一則—莊子の書の変遷から見た内篇と外・

雜篇との關係について—

Satsasai の青春文学

宋と大食

日本文語動詞活用組織と語基構成母音

アツバース朝時代のマニ教について

西域梵本法華經の一写本に就いて

中国の文字改革—解放後の経過について—

形容詞のない言葉—原始日本語論—

高橋盛孝

安部 源一

情松 健夫

石田 幹之助

井ノ口 泰淳

今西 春秋

入矢 義高

岩本 裕

内田 吟風

岡崎 精郎

小笠原 宣秀

長田 夏樹

愛宕 松男

小野 勝年

小野 川秀美

加藤 一朗

壁瀬 灌雄

河崎 章夫

神田 喜一郎

木村 英一

木村 秀雄

桑田 六郎

江 実

佐藤 圭四郎

真田 有美

芝田 稔

高橋 盛孝

通訳グルマフン

明代の九辺鎮

敦煌本・シナ仏教々団制規—特に「行像」の祭典について—

タイ詩の構成形式について

敦煌発見唐職制戸婚賦庫律断簡

断代史について

東京大船主イツチエン攷

スタイン敦煌発見の天下姓望氏族譜

— 唐代の身分的内婚制をめぐって —

西夏語の数詞について—その再構成と比較言語学的考察

元の帝師について

倭人が鬻草を賣いだこと

ガルダン伝雜考

論語の「人不知而不慍」について

西夏經—石と木と泥と—

( 現存する最古の木活字本について )

カリフ・ムウタシムとトルコ奴隸兵

李觀について

中山艦事件の一考察

滿洲シヤマニズムの祭神と祝詞

居延出土の一冊書について

伯夷叔奇は狐である

養生月覽について

耶悉茗、末利、素馨 (Jasminum) 考

蒙古古包名義攷

婦去來の辞と仏教

北周の大誥について

カマラシーラの修習次第

田中 克巳

田村 実造

塚本 善隆

富田 竹二郎

内藤 乾吉

内藤 戊申

中村 孝志

仁井田 陞

西田 竜雄

野上 俊静

稲葉 正雄

橋川 時雄

羽田 明

林 秀一

藤 枝 晃

藤本 勝次

本田 濟

三上 諦聰

三田 村泰助

森 鹿三

森 安太郎

守屋 美都雄

山田 憲太郎

山本 守

吉岡 義豊

吉川 幸次郎

芳村 修基

## あとがき

### ◇石浜先生古稀記念講演会について

石浜先生がこのほど古稀の賀をお迎えなられますことは、われわれ一同まことに喜びにたえません次第であります。表紙にも掲載いたしましたとおり、そのお祝の微意をもつて来る十一月十六日「史学会講演会」を開催いたします。講演会にひきつづいて石浜先生古稀記念会では、記念論文集の贈呈式や、祝賀の宴を催しますので、できるだけ多くの方々のお集りをいただいてお喜びをともにいたしたいと存じます。

◇『歴史と時の流れ』講演会の開催 既報のごとく、関西大学東西学術研究所（所長石浜教授）では、去る十月二十六日（日）午後一時半より、毎日新聞社大阪本社講堂において毎日新聞社・大阪府教育委員会の御後援のもとに、現代史の動向を歴史家の立場から解明する講演会を左のとおり開催した。

アラブ民族運動の特性

関西大学助教授 藤本勝次氏

アメリカ世界政策の伝統

大阪大学助教授 今津 晃氏  
関西大学講師

中共とソ連

中共の対ソ主体性  
慶応大学教授 石川忠雄氏

なお、この講演内容については、できれば近く印刷に付して本誌上にも掲載したいと思つてゐる。

◇「史泉」 本号は史学関係の行事もなかなか多端をきわめているさなかに、執筆者各位にはなほ御無理を願うこととなつたものであります。ことに三上・大庭両先生には御多忙中にごい分御迷惑をおかけしましたし、例によつて横田先生には学会出張後の寸刻をさいて御執筆いただいた次第です。江里口（旧姓三名田）氏の原稿のほうは実はかなり前にいただいていたもの、まつたく編集上の都合で本号にようやくその前半を掲げました。氏の御了承を乞う次第です。なお次号で完結予定であります。「史泉」の編集・発行がとかく不順になりがちであります。次号は十二月に予定どおり発行いたしますので、原稿を縮切日はとくに設けません。随時に原稿をお寄せ下さるよう願つております。

◇見学会 比叡山見学 九月三十日（火）前期試験後の休日を利用して比叡山の見学を行った。十時半、京都四条大宮に集合、京阪バスにてドライブウエーを登り、宿院にて蘭田先生より「比叡山と最澄」の講演を承り、昼食後境内を見学。帰路、東へ下つて三井寺・円満院を見学。六時解散。参加者、有坂・蘭

田先生以下三十数名。

「正倉院展」見学 十月三十日（木）横田先生指導のもとに奈良博物館にて開催中の「正倉院展」の見学を開催する。十時半近鉄奈良駅前集合。時間の都合で元興寺「聖徳太子奉讃展」をも見学する予定である。（前号掲載の神護寺見学は従つて中止する）

◇末筆ながら、魚澄先生が八月末より神経痛をおこされ、しばらく休まれましたが、この頃はほとんどおよろしく回復されておりますので御安心下さい。また、原先生が御健康をそこなわれ、八月以来入院御加療中であります。一日も早く御全快のほどをお祈りいたしております次第です。

## 史泉 第二号

百円 下8円

昭和三十三年十月三十日発行

大阪府吹田市千里山

編集兼 関西大学史学会  
発行者

振替大阪二六〇一六番

代表者 魚澄 惣五郎

京都市南区東九条西岩本町八

印刷所 大宝印刷株式会社